

一人称小説の教材性

— 『故郷』 を具体例として —

A Study on teaching materials value of the first-person novel

仁野平 智 明

NINOHIRA Tomoaki

1. はじめに

小学校・中学校・高等学校の文学教材（物語・小説等の散文）は、小学校低学年ではほとんどが三人称語りのいわゆる「物語」が中心であるが、中学年、高学年、そして中学校と進むにつれて、主人公が回想して語る一人称語りの小説が次第に増え、高等学校になると、その多くが一人称小説であることに気付く⁽¹⁾。登場人物を三人称で語る全知的視点をもつ語り手によって、世界のすべてが対象化して語られる「物語」であれば、語られた全てを無条件的に事実とし、自らを主人公に託して物語没入型の読みを行ったとしても、それは豊かな文学体験となる。しかし、一人称小説においても同様に読むならば、語り手としての主人公の存在を透明化することになり、語り手の知り得た世界、その中でも語る対象として選ばれた出来事についての語り手の思いを共有するだけの、主人公主義的な読みにとどまる。一人称小説を読むには、語り手自身をも考察の対象とする俯瞰的な読みの方略が必要である。三人称全知視点の物語を読み慣れてきた学習者にとって、世界の構造化という点からいえば、質的に異なる新たな読み方であり、また、語り手の対象化という方略は、単に文学の読み方の問題にとどまらず、新たなパースペクティブの獲得として重要な意味をもつ。こうした観点からも、一人称小説の読みの指導は、学習者の読みの発達や認識構造に合わせて意識的に行われる必要がある⁽²⁾。

しかしながら、教科書採録の一人称小説教材に付せられた学習課題を見るに、その多くは、主人公の心情や、主人公によって語られた他の人物の心情についての理解を求めるものであり、一人称で語る語り手自身を考察の対象としたものはあまり見られない。文学的文章指導において主人公主義的な読み方からの脱却は大きな課題であ

る。中学校学習指導要領の〔第3学年〕「C読むこと」の指導事項に「イ 文章の論理の展開の仕方、場面や登場人物の設定の仕方をとらえ、内容の理解に役立てること。」とあり、また〔第3学年〕「C読むこと」の言語活動例には、「ア 物語や小説などを読んで批評すること。」とある。しかし、「場面や登場人物の設定の仕方をとらえ」たり、「批評」したりするのに、主人公主義的な読みでは好悪レベルの印象的な感想にとどまり、本来的な批評とはなるまい。本論は、語り手が主人公自らが回想する一人称小説の特性をもとに、その教材性を具体的な文学テキストを例に提示するものである。

2. 一人称小説の特性と教材としての有効性

まず、一人称小説における語りの構造を確認する。基本的に、語りは一人称の主である語り手によってなされる。当然ながら、語られた世界を形成する要素としては、その語り手の認知し得た内容のみに限定されるのだが、かといって、語り手の認知したすべてを余さず記すことは、実際的に不可能に近く、また、仮に試みたとしても、その行為は繁雑を極め、語りを有効なものとなし得ない。そのため、結果的にその内容は、常に部分的削除を要件とし、削除を免れるのは語り手にとっての必要条件を満たす内容に限られる。つまり、一人称小説において語られた世界は、意識的、無意識的に関わらず語り手の「編集」を経たものであると言い換えることができる。本論では、これを「語り手の編集した世界」と名付ける。とすれば、「語り手の編集した世界」を内包し、その外側にあるのが「語り手の認知した世界」である。さらに、語り手はある世界に存在しているが、その世界のすべてを認知し得ない以上、「語り手の認知した世界」と並立して語り手の認知しなかった世界をも内包する「語り手の存在した世界」が設定できる。この三層構造が、本論における一人称小説の世界観である。以下に、この概念を図示する。

I 語り手の編集した世界 = 語り手の語った世界

↑ 内包

II 語り手の認知した世界 = 語り手の語った世界 + 語り手の語らなかつた世界

↑ 内包

III 語り手の存在した世界 = 語り手の認知した世界 + 語り手の認知しなかつた世界

なお、Ⅲにあたる世界をさらに分類すれば、一人称小説内に他の人物が登場する場合、「語り手の認知しなかった世界」は、「他の作中人物のみが認知した世界」と、「語り手を含むどの作中人物も認知しなかった世界」に分けられる。

ここで、1節に述べた三人称小説と一人称小説の読みの相違点について再び想起するに、先の概念図式に照らせば、三人称小説は、「Ⅲ語り手の存在した世界」をすべて知る立場で語られていると表せる。翻るに、一人称小説の最表層にあるのは「Ⅰ語り手の編集した世界」のみであるにも関わらず、三人称小説の場合と同じように主人公主義的読みのままで終わってしまうならば、Ⅰの層にある「語り手の語った世界」がⅢの層と同一であるかのようにみなし、「Ⅱ語り手の認知した世界」に内在する「語り手の語らなかつた世界」や、「Ⅲ語り手の存在した世界」に内在する「語り手の認知しなかった世界」を置き去りにしてしまう。かくして、視点は単一に、読みは表層にとどまる。本論では、このような一人称小説の語りの構造と、仁野平（2012）において指摘した、以下に示す語りの三つの特性⁽³⁾を併せ、一人称小説に望まれる読みのあり方について考察する。

「①語る動機」

語り手にとってその経験が大きな意味をもつとき、語り手は語るに足る価値を見出し、語りたいという意志をもって恣意的に語る。

「②過去と現在の関係性」

語り手は当時のことを対象化して語ってはいるものの、現在の思いが回想内容に分かちがたく入り込む。

「③語る内容の限定性」

語り手は自分の知り得たことしか語らず、語られる対象や内容は出来事全体に対して常に限定的部分にとどまる。

これら三つの特性を、前述の語りの三層構造と重ねれば、「①語る動機」は「Ⅱ語り手の認知した世界」から「Ⅰ語り手の編集した世界」を生み出す際のいわば編集方針であり、「②過去と現在の関係性」は「Ⅰ語り手の編集した世界」に時間による歪みという座標軸を加えたもので、「③語る内容の限定性」の作用に着目すれば、「Ⅱ語り手の認知した世界」の内包する「語り手の語らなかつた世界」に目を向ける契機となる。このように、語りの構造と特性の両方の観点を用いて一人称小説を読むことで、一人称小説の三人称小説たりえない部分、すなわち、「語り手の語らなかつた世

界」、「語り手の認知しなかった世界」に焦点を当てれば、新たなパースペクティブの獲得につながり、読みの転換のダイナミズムを感得⁽⁴⁾できる。

ただし、以上の観点は、たとえば一人称小説を読む際の方策として、学習者にあらかじめ使用させるものではない。主人公主義的読みは、一人称小説においても読みの第一段階であり、その時点で前述の観点を方法知として授けられ、活用を要請されても、読みの実体を未だ持たない学習者には受容しがたい。

そこで、改めて教室で文学テキストを読むことの意味に立ち返る。文学テキストの受容において、個人の読書と教室での学習との最大の相違点は、再読にある。個人の読書は一度限りの通読が一般的で、時を隔ててテキスト全体を読み返すことはあっても、特定部分を読み返したり、他の部分と対比して読んだりすることは少ない。これに対し、教室で読む場合、通読はまず出発点である。学習者は本文を一読し、語り手の語る内容を把握し、そのうえで、教師の発問などにより必要に応じて再び読み返す。こうした再読の機会こそが、一人称小説の構造に気付く契機となりうる。小学校以来、物語没入型による三人称語りの物語を読み慣れてきた学習者は、一人称小説においてもその読み方を援用し、語り手によって客観的事実が示されていると捉えがちである。そもそも一人称小説は、語り手自身が「読まれたい」と感じる内容について読者の無条件的受容を求めて語る以上、語り手の編集が加えられているにもかかわらず、それがあたかも対象化された出来事のすべてであるかのような錯覚に陥る読者が多い。こうした傾向を、むしろ学習の出発点として有効に活用したい。多くの学習者は、ひとまず三人称全知視点の小説と同様、主人公主義的に通読する。しかし、通読後の再読によって内容を整理する中で語り手の構造に気付いたとき、学習者は「Ⅰ語り手の編集した世界」の地平から離れ、「Ⅱ語り手の認知した世界」、さらには「Ⅲ語り手の存在した世界」全体を俯瞰的に見るという新たな観点を得て、語り手の選択意識や語られなかった事実を読み取るに至る。こうした読みの転換のダイナミズムを感得することは、再読を精読たらしめる要素の一つとして大きな意味をもつと言えるのではないか。以上の経験ののちに、「①語る動機」「②過去と現在の関係性」「③語る内容の限定性」という三点を、読みの方法知として獲得させるのがよいだろう。

とはいえ、読みの転換の契機は各テキストにより異なる以上、その設定には個別のテキストについての入念な教材研究が求められる。次節では、中学三年生の安定教材である『故郷』を取り上げ、本節で確認した一人称小説の語り手の構造と特性をもとに、

具体的な教材研究を提示する。なお、本論では一人称小説における語り手の対象化に焦点を当てるため、『故郷』の語り手である「私」の呼称を「語り手」と統一する。

3. 『故郷』の教材研究——一人称小説としての観点から——

3-1 「①語る動機」

「①語る動機」が「I語り手の編集した世界」の編集方針であるならば、「①語る動機」の精査によって、語り手の編集意図から外れた部分が浮かび上がる。なお、この編集意図を「語りたかった自己認識」としてさらに限定すれば、「意識的に作り上げ、表明を望んだ自己認識」と言い換えられ、その枠外にあるものは、「自己の認識の一部として披瀝してしまっているが、表明を望んだものとは無意識下において矛盾を見せている自己認識」であることになる。

『故郷』の語りは、語り手の帰郷から始まり、基本的には時系列に沿っている。冒頭部分の帰郷当初の語り手の思いと末尾部分の語り手が最終的に至った心境とを照応させ、帰郷における語り手の経験を通じて生まれた「①語る動機」を考察する。

まず、帰郷当初、語り手は故郷について以下の感慨を述べる。

私の覚えている故郷は、まるでこんなふうではなかった。私の故郷は、もっとずっとよかった。その美しさを思い浮かべ、その長所を言葉に表そうとすると、しかし、その影はかき消され、言葉は失われてしまう。やはりこんなふうだったかもしれないという気がしてくる。そこで私は、こう自分に言い聞かせた。もともと故郷はこんなふうなのだ——進歩もないかわりに、私を感じるような寂寥もありはしない。そう感じるのは、自分の心境が変わっただけだ。なぜなら、今度の帰郷は決して楽しいものではないのだから。

帰郷の目的が故郷との訣別である以上、故郷への未練や執着を消し去る方が、傷みを軽減できる。そもそも自分の思い描いていた美しさなどなかったとすれば、今、自分が感じている落胆も生じない。「こう自分に言い聞かせ」ることで、語り手は意識的に失意から逃れようとするのだが、それはとりもなおさず、そうしなければ抑えられないほど強く「美しい故郷」を求める思いがあることの裏返しである。さらに、母親がルントウの名を口にするや否や、語り手の意志とは関わりなく「このとき突然、私の脳裏に不思議な画面が繰り広げられ」て、「母の口から彼の名前が出たので、この子どもの頃の思い出が、電光のように一挙によみがえり、私はやっと美しい故郷を見た思

いがした」と語られていることから、それは読み取れる。ルントウを象徴とする語り手の美しい故郷への希求は、語り手の思惟操作の及ばないところに存在している。

一方、末尾部分では、「故郷の山や水もますます遠くなる。だが名残惜しい気はしない」として、故郷への執着もなく訣別の日を迎えたように語られている。しかし、その直後には「スイカ畑の銀の首輪の小英雄の面影は、元は鮮明このうえなかったが、今では急にぼんやりしてしまった。これもたまたまなく悲しい。」と語り、冒頭部分でフラッシュバックしたイメージへの未練を見せる。そのような故郷への思いの変容をたどりながら、遠ざかる船の中で、語り手は「今、自分は、自分の道を歩いているとわかった。」と語る。この気付きこそが、語り手にとっての「①語る動機」である。

つまり、語り手は、故郷に帰り、故郷の実態を受け止め、故郷を離れる中で自己の故郷への執着から脱却し、ひいてはある哲学的思念に至ったと自覚しているのであり、個別の経験から学んで覚醒した自分の姿が、「意識的に作り上げ、表明を望んだ自己認識」にあたる。

それでは、実際の語り手は、語り手が自覚するほどに故郷への執着から脱却しているのだろうか。冒頭部分についての検討で、「もともと故郷はこんなふうなのだ——進歩もないかわりに、私が感じるような寂寥もありはしない。そう感じるのは、自分の心境が変わっただけだ。」と「自分に言い聞かせ」ている語り手の意識的な思惟操作と、「ルントウ」の名を聞いただけで無意識のうちに「不思議な画面」が出現するとともに「言い聞かせ」を放擲し、美しい故郷のイメージに飛び付く衝動性という、対立的な要素を析出したのと同様に、末尾部分においても語り手の意識的な部分と無意識的な部分の双方がうかがえる。

まず、語り手は故郷を「名残惜しい気はしない」と明確に意識している。しかし「自分の道を歩いているとわかった」という重大な覚醒ののちになお、「まどろみかけた私の目」、すなわち、無意識の状態に近づいた語り手の目には、「海辺の緑の砂地が浮かんでくる」のである。この「海辺の緑の砂地」、「その上の紺碧の空には、金色の丸い月が懸かっている。」と語られる光景は、帰郷の日にルントウの名をきっかけに語り手の脳裏に「電光のように」繰り広げられたものとはほぼ同じイメージである。この「美しい故郷」の象徴を、自己の覚醒を意識したのちも反芻し続けること自体、執着の継続を意味する点で「意識的に作り上げ、表明を望んだ自己認識」と矛盾するのだが、さらに、そのイメージはそもそも、「銀の首輪の小英雄」あってこそその光景だっ

たはずである。主人公の面影が薄れてもなお、主役を失った舞台装置だけで鮮やかに成立してしまうのは、そのイメージがもとよりルントウの思い出ではなかったばかりか、もはや故郷の象徴ですらないことを意味する。それは希望という名のもとに語り手が逃げ込むための、新しい幻想の誕生に他ならない。

つまり、「①語る動機」として語り手が「意識的に作り上げ、表明を望んだ自己認識」とは、帰郷を通じた自己の覚醒のプロセスであったのだが、「自己の認識の一部として披瀝してしまっているが、表明を望んだものとは無意識下において矛盾を見せている自己認識」に着目すれば、何らかの幻想を心に秘めることで自己を支えようとする、語り手自身が望む自己像とは異なる一面が読み解けるのである。

3-2 「②現在と過去の関係性」

「語り手は当時のことを対象化して語ってはいるものの、現在の思いが回想内容に分かちがたく入り込む」という「②過去と現在の関係性」は、時間が語りに与える歪みを指摘したものである。この歪みには大きく分けて二つあり、まず単純に時間の経過に伴う忘却、思い違いといった記憶の劣化が挙げられる。もう一つは、時間軸の移動が自己の変容と関係するケースで、自己の解釈や認識が、回想の時点と語っている現時点で変化した結果、編集方針に変更が含まれ、回想の時点の自己に、現在の自己が介入する場合がある。『故郷』の語り全般においては、帰郷時を相対化して語る視点が明確ではなく、基本的には、帰郷時の時間軸に沿った実況的な語りとなっている。しかし、その中で語り手がルントウを回想する場面は、少年時代のルントウという過去を、語りの現在にある語り手がいかに把握するのか、その関係性を考えることのできる部分である。

語り手によるルントウに関する情報の提示は、まずこの場面から始まる。

紺碧の空に、金色の丸い月が懸かっている。その下は海辺の砂地で、見渡すかぎり緑のすいかが植わっている。その真ん中に、十一、二歳の少年が、銀の首輪をつるし、鉄の刺叉を手にして立っている。そして、一匹の「チャー」（獺）を目がけて、ヤツとばかり突く。すると「チャー」は、ひらりと身をかかわして、彼の股をくぐって逃げてしまう。

これは、実は語り手である「私」が直接目にした光景ではなく、のちに語り手によって示されるルントウ自身の談話の部分的な情報から、語り手が再構成したイメージで

ある。しかし、読み手にとってはこのイメージがルントウについて与えられた最初の情報であり、さらに直後の「この少年がルントウである」という語りの現在における断定性によって、読み手はそれが実在した場面の描写であるかのように巧みにいざなわれる。

このイメージの元となったと思われる情報としてルントウが語り手に話したのは、「晩には、父ちゃんとすいかの番に行く」、「番をするのは、穴熊や、はりねずみや、チャーさ。月のある晩に、いいかい、ガリガリって音がしたら、チャーがすいかをかじってるんだ。そうしたら、手に刺叉を持って、忍び寄って……。」「チャーを見つけたら突くのさ。あん畜生、りこうだから、こっちへ走ってくるよ。そうして、股をくぐって逃げてしまうよ。なにしろ、毛が油みたいに滑っこくて……。」という体験談である。これはルントウだけの直接経験であり、語り手はその情報を頼りに、ある晩のルントウを思い描く。「紺碧の」空、「金色の丸い」月という象徴的な色彩と形状は、いずれもルントウの談話にはなかったもので、語り手の創作によるとみなされる。さらにいえば、その話を聞いたときの語り手自身が、チャーについて「どんなものか、見当もつかなかった——今でも見当はつかない——が、ただなんとなく、小犬のような、そして獰猛な動物だという感じがした。」と語り、未知の動物であったことを明らかにしているにもかかわらず、語り手の再構成したイメージの中では、チャーはごく自然に、そして確かに現れ、ルントウを翻弄するのである。

しかし、それが語り手の直接経験でも、ルントウの経験した事実の忠実な描写でもないことは、のちに回想されるルントウの談話と詳細に照らし合わせるまで、読み手は知るべきがない。語り手は、この場合、イメージがあまりに鮮明であることから見て、時間の経過による単純な記憶の劣化によって、聞いた話と自分の創造したイメージを混同したというよりは、時間の経過の中で、イメージに事実と同様の価値を覚え、自らの目にした光景であるかのように振る舞うことで、読み手に同じ価値判断を共有するように促すトリックを用いていると言える。

このトリックが功を奏しているのは、語り手が、その編集意図により「Ⅱ語り手の認知した世界」の時間の一部に回想場面を挿入することで、「Ⅲ語り手の存在した世界」の時間軸を部分的に分断し、組み替えているからである。「Ⅲ語り手の存在した世界」に流れた時間は、その性質上必ず最も遠い過去から最も近い現在へ、すなわち語り手の誕生から語り手による語りの終了時まで、一方向かつ一定であるのだが、語り

手が過去の一部を切り取り、別の時間の流れに挿入すれば、読み手の時間軸と「Ⅲ語り手の存在した世界」のそれとを乖離させることが可能になる。読み手は、語りの一文字目から最後の文字までを順に読むという読み手特有の時間軸に縛られる以上、回想場面の挿入という編集行為により、語り手が「Ⅲ語り手の存在した世界」に流れた時間をねじ曲げて、その時間の流れでは元来知り得ない情報を読み手に提示させたとしても、自らの時間軸を離れることはできない。

先に、『故郷』の語りについて、基本的には帰郷時の時間軸に沿った実況的な語りであると述べたが、詳説すれば、帰郷時の出来事についての語りを抜き出した場合、「Ⅲ語り手の存在した世界」の時間軸にほぼ沿っていて、故郷を離れる時点で語りを終了し、その時点をのちに捉えたさらなる語りはない、という意味での実況的語りであり、帰郷時以前の出来事については、帰郷する前の語りとして初めに述べられていない以上、「Ⅲ語り手の存在した世界」に流れた時間に沿っているとはいえない。『故郷』の中で語られた出来事を「Ⅲ語り手の存在した世界」に流れた時間に基づいて抜き出すと、以下のとおりである。初めは「三十年近い昔」、正月の大祭の準備に、かねてから名前だけは知っていたレントウが呼ばれることを知った語り手は心待ちにし、年末に出会い、正月過ぎに別れ、その後贈り物のやりとりが一、二度あった、というおそらく数ヶ月間ほどのひとまとまりの経験で、次に「二十年前」、語り手が故郷を離れたことは、「別れて二十年にもなる故郷」と語られるだけで、詳しい事情は説明されない。そして、「語りの現在」、帰郷の船中から翌日の自宅到着、四、五日以上経過後のレントウとの再会、その十日後の故郷との別れまでのおそらく一ヶ月に満たない経験が語られる。

しかし、「Ⅰ語り手の編集した世界」によって読み手が知らされる順序は、上記の時系列とは以下のように異なる。

語りの現在

帰郷初日

帰郷の船中、故郷について述懐する

二十年前

語り手は故郷を離れる

→

*これは挿入された別時間軸のため、
 として区別した。以下同様。

語りの現在

帰郷翌日

自宅に到着し、母・ホンルと会う

母がレントウの名を口にする

イメージ (月夜のすいか畑で少年がチャーと戦う光景)

「この少年がレントウである」

三十年近い昔

- 以前から 語り手はレントウの名を耳にしている
- ある日 語り手はレントウが大祭の手伝いに来ることを知る
- 以降毎日 語り手はレントウが手伝う大祭の日である正月を心待ちにする
- 年末 語り手の家にレントウが来て、二人は初めて出会う
- その翌日 語り手はレントウに鳥の捕獲を依頼する
- 語り手はレントウから夏の日々の過ごし方の談話を聞く
- 正月過ぎ レントウが語り手の家から去る
- その後 レントウから語り手に贈り物が来る
- 語り手からレントウにも一、二度贈り物をする

語りの現在

- 帰郷翌日 母とレントウの話をする
- ヤンおばさんが現れる

子供の頃(時期不明) ヤンおばさんの思い出

語りの現在

- 帰郷翌日 語り手はヤンおばさんと会話を交わす
- その後四、五日間 訪ねてきた親戚と応対し、荷づくりをする
- その後のある日 レントウが語り手の家を訪ね、再会する
- その翌日 レントウが自宅に戻る
- レントウ帰宅の九日後 語り手が母・ホンルを連れて船で故郷を去る
- 母がレントウに二日前にかけられた窃盗疑惑を語る
- 語り手の「銀の首輪の小英雄の面影」はぼんやりする
- 語り手は「自分は自分の道を歩いている」とわかる
- 語り手は新しい生活と希望について考える

イメージ(海辺の広い緑の砂地 その上の紺碧の空には金色の丸い月が懸かっている)

語り手は希望について自らの考えを述懐する

語りの現在において、成長したルントウが実際に語り手の目の前に現れるのは、語り手が故郷を去る十日前であり、自宅に到着してから少なくとも五日以上経過している。それまでの間、語り手がルントウについて抱いてきた美しい故郷を象徴するイメージは保たれた。しかし、再会したルントウは語り手にとって「でくのぼうみたいな人間」にしか見えず、椀や皿の窃盗疑惑を経て、「すいか畑の銀の首輪の小英雄の面影」は「急にぼんやり」してしまう。

語り手がルントウについて語る順序を検証すると、語りの現在における帰郷行動の翌日、すなわち自宅に到着した日の出来事を語る中で、かつてのルントウの姿が複数のエピソードを備えた回想として差し挟まれ、鮮やかに、綿々と読み手に提示される。読み手がまず印象づけられるのは、三十年前のルントウの「神秘の宝庫」の心をもった姿である。つまり、ルントウの存在はすでに読み手に紹介されているのだが、それは語りの現在におけるルントウではない。日数をほぼ明確にする形で、語りの現在の時間の流れに沿う実況的な語りにおいて、このルントウの少年時代の回想場面が語りの現在におけるルントウの登場よりも早いのは、語り手の認識において「小英雄」が「でくのぼう」に零落する衝撃を読み手に追体験させるためである。「小英雄」のエピソードは語りの現在における「でくのぼうみたいな」ルントウとの再会后、二度と繰り返されない。

同じく、過去と語りの現在とではすっかり様子が変わってしまった人物として、ヤンおばさんについても帰郷行動の翌日に語られているのだが、ヤンおばさんの場合は、まず未知の人物、それも良い印象とは言いがたい様子的人物として語りの現在に姿を見せ、母から名前を出されてようやくその存在を思い出すという順序で語られ、かつての印象も今とは見分けが付かないというだけで、ルントウの思い出のように鮮明ではなく、現在と落差があることに衝撃や落胆を感じているわけでもない。語り手が説明を長く費やし、読み手に共有を求めているのは、現在のヤンおばさんの語り手にとっての不快感である。つまり、いくらかの回想が挿入されているとはいえ、ヤンおばさんの姿は、ルントウの場合とは異なり、明らかに語りの現在性の中で読み手に提示されている。

また、時間軸という観点で語りの順序を読み解くと、語り手によるルントウのエピソードの挿入は、自らの創作したイメージを補完し、より印象づける目的で行われて

いるとも考えられる。まず、「不思議な画面」として真っ先に語られるのが紺碧の空に金色の丸い月、海辺の砂地に緑のすいか、銀の首輪をつるし刺叉を持ってチャーと勇敢に渡りあう少年の姿という一連のイメージである。このイメージの直後に、ルントウとの出会いをめぐる複数のエピソードが次々に展開され、「この子供の頃の思い出が、電光のように一挙によみがえり、私はやっと美しい故郷を見た思いがした。」と語り手はイメージとそれを補完するエピソード全体を「美しい故郷」として規定する。ところが、語りの現在においてルントウと再会し、「記憶にあるルントウとは似もつかない零落した姿のルントウから「旦那様」と呼ばれ、「でくのぼうみたいな人間」という評価を下すという一連の出来事によって、この「美しい故郷」の好ましいイメージの中の「すいか畑の銀の首輪の小英雄」は鮮明さを失ってしまう。この変遷に作用した最後のエピソードとして直前に挿入されているのが、母の談話によるルントウの窃盗疑惑である。好ましいイメージの証拠として読み手の追体験を促す美しいエピソードが挿入されたのと同じ手法で、のちにそのイメージを壊す出来事が起こると、変わってしまったイメージに悲しいエピソードを重ねて、読み手の共感と呼ぼうとする、語りのテクニックが読み取れる。

このように、『故郷』の語りにおいて「②現在と過去の関係性」に焦点を当てれば、語りの現在の時間軸に挿入された過去のエピソードが語り手の創出したイメージに意義を与え、さらにそのイメージの変遷を読み手に追体験させ、共感させる仕組みの存在を俯瞰的に見ることができる。読みの転換を果たした学習者は、自らが語り手にいざなわれた「Ⅰ語り手の編集した世界」にいたことを知るとともに、その地平から脱却するのである。

3-3 「③語る内容の限定性」

学習者が最表層にある「Ⅰ語り手の編集した世界」を相対化し、「Ⅲ語り手の存在した世界」に到達するには、「Ⅱ語り手の認知した世界」の外側にある「語り手の認知しなかった世界」に目を向ける必要がある。先に、この世界を「他の作中人物のみが認知した世界」と「語り手を含むどの作中人物も認知しなかった世界」に分類したが、本節では「他の作中人物のみが認知した世界」に着目し、他の作中人物に視点を移すことで初めて明らかになる語り手自身の姿を考察する。

『故郷』における視点の移行と語り手の相対化に関しては、多くの指摘がある。なか

でも語り手とルントウの再会場面について着目したものとして、たとえば田近洵一氏は、読者は語り手に寄り添って共感的に読むものだとした上で、教室における読みを活性化する契機として、語り手の視点を相対化する必要性を指摘している。

自分たちが「壁」に距てられていることを自認しつつ、「私」は一度のみ込んだことばを今度は意識的に口にすることはできたはずだ。意識的に口にすることで内なる制度（田近氏のいう「制度」とは、社会的状況の支配のこと：仁野平注）を破ることができたはずだ。そうしないから、「私」は、結局は「壁」とのたたくかいを放棄し、「悲しむべき」などと言ってただ嘆くばかりになってしまった。語り手としての「私」は自分の悲しみを語りながら、しかしそこには、そんな自分を相対化する視点はなかったのである⁽⁵⁾。

また、河野庸介氏は、この場面を読むには視点の転換が有効であるとして、次のように指摘する。

この場面は、「わたし」の視点で叙述がなされている。その視点を転換して、「閨土」の視点でこの場面をとらえ直し、閨土の立場で考えてみることで読みを深めることになる⁽⁶⁾。

ただし、単純に他の作中人物の視点に立つだけでは、主人公主義に連なる登場人物主義を脱し得ず、また、一人称小説である『故郷』において「『わたし』の視点で叙述がなされている」のはこの再会場面のみではなく全編をとおしてである以上、特定の場面のみ視点の転換をはかるのではなく、「Ⅲ語り手の存在した世界」全体に敷衍する語り手以外の視点による語り手の相対化が求められる。

そこで、本節ではこの再会場面を中心に「他の作中人物のみが認知した世界」を抽出し、「③語りの内容の限定性」の鏡像を描き出すよう試みる。

語り手とルントウは、「ある寒い日の午後」に再会を果たす。語り手は、まず三十年ぶりに目の当たりにしたルントウの「私の記憶にあるルントウとは似もつかな」い変貌ぶりを、伸びた背丈や黄ばんでしわの深い顔、赤く腫れた目、全身のふるえ、ひび割れた手など、全身にわたって克明に語る。そののち、語り手とルントウは言葉を交わす。

私は、感激で胸がいっぱいになり、しかしどう口をきいたものやら思案がつかぬままに、ひと言、

「ああルンちゃん——よく来たね……。」

続いて言いたいことが、後から後から、数珠つなぎになって出かかった。チアオチー、跳ね魚、貝殻、チャー……。だが、それらは、何かでせき止められたように、頭の中を駆け巡るだけで、口からは出なかった。

彼は突っ立ったままだった。喜びと寂しさの色が顔に現れた。唇が動いたが、声にはならなかった。最後に、うやうやしい態度に変わって、はっきりこう言った。

「旦那様！ ……」

私は身震いしたらしかった。悲しむべき厚い壁が、二人の間を隔ててしまったのを感じた。私は口がきけなかった。

語り手はこの場面で、口からうまく言葉が出ない自らの状況を三回にわたり繰り返す。

1. 「どう口をきいたものやら思案がつかぬ」
2. 「頭の中を駆け巡るだけで、口からは出なかった」
3. 「私は口がきけなかった」

これら三つの状況には、それぞれに異なる理由がある。まず1. では、ルントウとの再会に感激しすぎてうまく考えがまとまらない。次に、2. では、話したいことが具体的に浮かんできたものの、多すぎてすぐには整理できない。そして3. では、「旦那様」と呼ばれたことで互いの間に厚い壁を感じた衝撃のせいで、言葉を失う状態に陥っている。このように、口から言葉が出しにくい状態は同じでも、事情が異なるため、語り手は細分しているのだが、従来の論では、3. の状況のみが扱われがちで、三つの状況について述べたものでも、すべての状況を一連の流れとみなしたり⁽⁷⁾、1. と2. の状況を同一に扱う⁽⁸⁾など、語り手が三つに分けた意義を段階的に捉えていない。

1. では感情が先立って、何を話していいかすぐに決めかねた語り手であったが、かろうじて「ルンちゃん」と昔ながらの呼称を口にすることで、ルントウとの思い出が矢継ぎ早に浮かびながらも、今度はそれが「何かでせき止められたように」口に出せない。この「何か」をルントウ像の変貌と読み解く論もあるが⁽⁹⁾、ルントウとの再会直後、語り手がその変貌ぶりをつぶさに観察しながらも、その時点での落胆には直接的に結びつかず、「感激で胸がいっぱい」になっているところから考えて、その仮定は適切とは言えない。この場合「何かでせき止められたように」の「何か」を忖度することが重要なのではなく、口から言葉が出ない状況を強調するための比喩表現

の一部として捉えるべきである。

この三つの段階を経て語り手が表したかったのは、語り手には、「ルンちゃん」に対して話したいことはじゅうぶんにあったが、「旦那様」と自らを呼ぶ使用人「マンユエ」のルントウに対しては言うべき言葉を失ったという、自身にとってのルントウとの関係性の変化による断絶の瞬間である。

一方で語り手は、ルントウもまた言葉をうまく口にできない状態にあったことを語っている。「唇が動いたが、声にはならなかった」ルントウが、「はっきり」と「旦那様」と発言する過程に、語り手は「喜びと寂しさの色」が「うやうやしい態度に変わっ」たという語り手から見たルントウの感情の変化を織りまぜて、語り手にとっては昔と変わらず分け隔てのない友人としての関係が、使用人としての態度を示したルントウによって、その瞬間に分断されたかのように語る。この過程に寄り添った主人公主義的な読みは、ややもすると語り手の期待を拡大解釈し、語り手はルントウから「シュンちゃん」と呼ばれたかった、さらには、ルントウの唇が動いたのは、「シュンちゃん」と呼びたかったからだ、という想像にまで発展する⁽¹⁰⁾。

しかし、それはあくまでも「Ⅰ語り手の編集した世界」の導いた読みであり、「Ⅲ語り手の存在した世界」の中の、「他の作中人物のみが認知した世界」を読み解けば、語り手が認知しなかった側面が浮かび上がる。

語り手と故郷をめぐる事実関係において、最も注目すべきは、作中人物のうち語り手のみが、二十年の長きにわたり故郷に不在であったという点である。自身が不在であった間に故郷に流れた時間を、語り手は共有できない。『故郷』における作中人物の人間関係を整理すると、語り手とルントウが少年の頃初めて出会ったとき、語り手の父は存命で、「私は坊ちゃんにいられた」と語り手自身が言及するように、雇い主であり「旦那様」としての父、使用人としてのルントウの父、雇い主の子で「坊ちゃん」の語り手、使用人の子のルントウ、という関係から始まったことが見て取れる。その後、それぞれの父の死を経て家督が譲られ、自動的に語り手が「旦那様」と呼ばれる立場になったことは、ルントウの語り手の母に対する「御隠居様」という呼称からもわかる。語り手の父が「旦那様」であった頃、母は「奥様」とでも呼ばれる立場であったのが、直接的な雇い主の妻ではなくなったから「御隠居様」と呼ばれているわけである。語り手が故郷に不在の間も、成長して一家の主となったルントウは使用人として語り手の家に入出入りし続け、語り手の母を「御隠居様」と呼び、「うやうやし

い態度」で接してきた。語り手の母の言うところの「いつも家へ来るたびに、おまえのうわさをしては、しきりに会いたがっていましたよ。」というルントウの語り手に対する呼称は、以前から「旦那様」であったと考えるのが自然である。つまり、他の作中人物である語り手の母とルントウが認知していた世界では、語り手はかねてから「旦那様」であった。それを認識していなかったのは、故郷に流れた時間から取り残されていた語り手のみであったのだ。時間を共有できない語り手にとって、自分が故郷を去ったときから時間は停止したままであり、変化を免れた認識は、「美しい故郷」のイメージとして膠着し続けた。「うやうやしい態度」と「旦那様」の呼称に、語り手は「悲しむべき厚い壁が、二人の間を隔ててしまったのを感じ」て、「口がきけないほどに落胆するのだが、ルントウの認知からすれば、それは「わきまえ」であり、使用人としての最大の敬愛の表現であったのだと言える。

ここで、故郷で時間を共有してきたはずのルントウと語り手の母の認知に食い違いがあるように見えるのが、語り手の母の「まあ、なんだってそんな他人行儀にするんだね。おまえたち、昔は兄弟の仲じゃないか。昔のように、シュンちゃん、でいいんだよ。」という発言である。言葉通りに受け取れば、まるで語り手の母はルントウのかしこまった態度をたしなめて、「シュンちゃん」と呼ばせたがっているかのようだが、その一方で自分を「御隠居様」と呼ぶことは訂正せず、「自分で台所へ行って、飯をいためて食べるように勧め」、使用人として扱うところに矛盾がある。そこで語り手の母の認知した世界に目を向ければ、やはりルントウは使用人であり、他人行儀にするな、という言葉は、ショックを受けている様子の語り手を取りなすためや、夫が健在で「家の暮らし向きも楽」だった良き時代へのノスタルジーから生まれた一時的な思いつきでしかないと読み取れる。それを「めっそうな、御隠居様、なんとも……とんでもないことでございます。」と否定し、「あの頃は子供で、何のわきまえもなく……」と続けるルントウは、自身はむろんのこと、語り手の母も暗に求める使用人としての「わきまえ」を体現する。自身はかつて子供の頃「わきまえ」がなかったとしても、本来それが許されない関係性であることを自身の子供に分からせ、また、子供に諭す姿を雇い主に見せるためにも、ルントウは息子のシュイションに自分の前に出てお辞儀するよう二度も強いるのである。しかし、停止したままの時間に生きることを望む語り手には、そのルントウの変化が、むしろ故郷に二十年暮らし続けた者たちには自然な流れであることを認知しがたい。そのことは、「痩せて、顔色が悪く、銀の

首輪もしていない違い」を認めながらも、シュイションに「これぞまさしく三十年前のルントウであった。」とルントウの姿を重ね、家に遊びに来るようシュイションに誘われたと話すホンルに自らの姿を重ねて、「思えば私とルントウとの距離は全く遠くなったが、若い世代は今でも心が通い合い、現にホンルはシュイションのことを慕っている。せめて彼らだけは、私と違って、互いに隔絶することのないように……」と願う語り手の認識にも表れる。ルントウにしてみれば、「わきまえ」が身につけばシュイションもまた、ホンルに雇い主の家族としての恭順を見せるはずであり、ホンルもシュイションも子供同士であればこそ、今は友人のように付き合っているにすぎない。しかし、子供の頃の関係性に執着する語り手は、自身の認識が子供時代のままであることも自覚せず、二人を「若い世代」とみなし、社会問題に転嫁する。「私と違って」という前提も、純粹に二人のことだけを考えているのではなく、「本来は私がそうありたかったのだが、私には叶わなかった」という仮託である点で、自己の理想郷の幻影への執着を露呈している。

同様の論法をもって語り手は、ルントウを「でくのぼうみたいな人間」にした社会を批判する。しかし、それもルントウの認知する世界に目を向ければ、雇い主と使用人という主従関係の社会的是非や苛酷な生活状況はともあれ、自らの境遇に求められる「わきまえ」に徹することに自覚的であり、「でくのぼう」とは異なる主体的なルントウの姿が見出せる。このように、「Ⅰ語り手の編集した世界」を相対化し、「③語る内容の限定性」が、ときに語り手の観点による偏向を意味することに気付くとき、学習者に読みの転換が訪れるのである。

4. おわりに

一人称小説における「Ⅰ語り手の編集した世界」、「Ⅱ語り手の認知した世界」、「Ⅲ語り手の存在した世界」の三層構造と、「①語る動機」、「②過去と現在の関係性」、「③語る内容の限定性」の三点の特性をもとに、語り手自身を考察の対象とする読みの方略が学習者にもたらす読みの転換のダイナミズムについて、『故郷』を例に考察した。

一人称小説を一読するとき、学習者が主人公主義的読みによって物語世界に没入するとすれば、それは主人公に自己を重ね合わせ、いわゆる我がことのように感情移入した結果であり、主人公は学習者の自己の延長線上に招き入れられたにすぎない。その点では、たとえ他の作中人物に視点を移し、その人物の心情を推し量る発問が与え

られたとしても、その営みはやはり、単純に役をすり替えただけのダッシュの付いた主人公主義の域を出ない。しかし、教室での再読を経た学習者が、一人称小説における語り手は三人称小説の全知的視点を持ち得ない一個人であることを認識し、個人の編集による物語世界には、限界もあれば、工夫もあることを知るとき、俯瞰的視点を得た学習者は、自己と混じり合っていた物語世界を対象化し、文学テキストとしての批評が可能になる。

その過程で学習者は、自己の置かれた読み手という立場にもまた、限界があることについて認識する。すべての読み手は、初読において、語り手の編集による限定的情報を、語り手の提示する順序で知るより他にすべがないという時間軸に縛られている。語り手が「Ⅱ語り手の認知した世界」から何を選び取って「Ⅰ語り手の編集した世界」を構成したかを読み取るのも、また、「Ⅲ語り手の存在した世界」の時間軸を組み替えて編集を行った場合、読み手特有の時間軸の存在に気付いたうえでそれを並べ直すのも、初読における読み手の限界を超克する再読ならではの醍醐味である。

かくして、学習者が、読みの初期段階において物語世界に没入し得たのは、語り手が仕掛けたトリックやテクニックの効果の賜物であり、種々の表現力のなせる技であることを学ぶとき、文学テキストはより鮮やかさを増し、再読は精読に至るだろう。

学習者の文学体験の貧弱さが危ぶまれる今日、国語の授業で出会う文学テキストに望まれる役割は多様性を増している。本論では、一人称小説教材の再読における、語り手の対象化のプロセスを通じて、学習者が一人の人間としての語り手と邂逅し、読み手としての自己を発見する契機を得ることに、教室における文学体験の意義の一端を捉えようと試みた。加えて、一人称小説教材の特性である初読と再読との懸隔を生かし、さらに再読から精読へと志向する教材性の精査を今後の課題としたい。

〔注〕

- (1) 小・中・高における平成 25 年度使用の全社全種類の教科書（高校は必履修科目「国語総合」のみ）に採録されている物語・小説教材を、三人称・一人称（物語世界外からの語り）・一人称（主人公による語り）という三種の語りの形態から分類した。以下に、それぞれの延べ教材数を示す。

		三人称	一人称 (物語世界外)	一人称 (主人公)
小学校	(低学年)	61	0	1
	(中学年)	40	6	5
	(高学年)	22	7	12
中学校		30	7	25
高等学校		56	0	75

高校教材の「三人称」「56」の内、「23」は『羅生門』である。また、高校教材には、選択科目「現代文」（新課程では「現代文A」「現代文B」）の『こころ』や『舞姫』など、主人公が回想して語る一人称小説は他にも多い。

(2) 山本亮介氏は、「虚構理論から考える一人称小説と随筆の偏差—中学校国語教材をめぐって—」（『信州大学教育学部研究論集』第5号 2012.3）において、「現行の中学校国語教科書に採録されている小説作品は、いわゆる一人称形式の表現形態をとることが多い。その理由や是非はともかく、現状において、授業者が一人称の小説教材に諸種の対応を求められているのは間違いない。」と指摘している。

(3) 仁野平智明「山田詠美『海の方の子』の教材価値—一人称語りのトリック—」（『沖縄国際大学日本語日本文学研究』第17巻第1号 通巻第30号 2012.10）において、「語り手が自らの体験を回想する一人称語りの小説を教材として取り扱う際に求められるのは、まず第一に、語り手の語る動機をとらえることである。人は自らの体験すべてを等価にみなすわけではない。その経験が自分にとって大きな意味をもつとき、語るに足る価値を与え、語りたいという意志をもって語るのである。語り手が人格をそなえた作中人物である以上、語られる内容には語り手による恣意的操作、つまり選択意識が働いていることを忘れてはならない。第二に、当時の出来事を現在の語り手が語るという二重構造を把握したうえで、当時の思いと現在の思いとの関係性に配慮する必要がある。語り手は当時のことを対象化して語ってはいるものの、現在の思いが回想内容に分かちがたく入り込むことが往々にして起こるからである。そして第三に、語り手は自分の知り得たことしか語れないという構造を把握しておくべきである。語り手は回想部分における主人公でもあり、全知的視点の語り手ではない。語り手が、ある出来事について自らの経験した側面しか語り得ない存在である以上、語られる対象や内容は、出来事全体に対して常に限定的部分にとどまるほかない。」と述べた。

(4) (3) に同じ。

(5) 田近洵一「魯迅『故郷』における人間追求—反転する人間理解—」（『文学の力×教材の力 中学校編3年』（田中実・須貝千里編 教育出版 2001.6）

(6) 河野庸介『国語科授業にスリルとサスペンスを』（教育出版 2010.2）

(7) 増田修氏は「魯迅『故郷』をどう読むか—教材化の一視点—」（『國學院大學教育学研究室紀要』第36号 2001）でこの場面について、「『ああルンちゃん—よく来たね……。』から「口からは出なかった。」までをA、「『旦那様！……。』から「私は口がきけなかった。」をBに分割し、Aで言葉が出ない理由を「血肉化した美しい故郷のイメージが、変わり果てた閩土の前で次々と消失していく」ことに、Bでは「中国社会の暗部が閩土という具体

的存在にのりうつって、『わたし』のまえに 出現したことによる驚き、救いがたさの実感』に帰結したうえで、『どう口をきいたものやら思案がつかぬままに』から始まって『口からは出なかった。』『口がきけなかった。』という表現の重さこそ、ここでは読みとらねばならない。」とし、場面全体を「言葉が出ないほどの事態」と捉え、「空白の語りともいうべき方法」であると概括している。

(8) 田口守氏は「魯迅『故郷』の教材化をめぐる」(『茨城大学教育学部紀要(教育科学)』34号 1985.3)で、「わたしは、感動で胸がいっぱいになり」から「頭の中を駆け巡るだけで、口からは出なかった。」までを一場面として引用し、『何かにせき止められたように、頭の中を駆け巡るだけで、口からは出なかった』のは何故か。『感動で胸がいっぱい』なためではないだろう。『しかし』と逆接で受けていることから、そのことは想像できる。恐らく記憶の中のレントウ像との落差の大きさが、『わたし』をとまどわせたと解すべきだろう。」とし、1. の「どう口をきいたものやら」と2. の「口からは出なかった」を同様の事態の繰り返しであると捉えている。

(9) 増田修氏は「血肉化した美しい故郷のイメージが、変わり果てた閩土の前で次々と消失していく」(前掲論文:注7に同じ)とし、田口守氏は「記憶の中のレントウ像との落差の大きさ」(前掲論文:注8に同じ)による、とする。

(10) 田口守氏は「この時のレントウの表情に注意しよう。『喜びと寂しさの色』と作者は書いている。恐らく『喜び』だけであれば、『わたし』が期待していた『シュンちゃん』という呼び掛けより始まる会話が可能であったかも知れない。とすると、彼に『寂しさ』を感じさせたものが、自由な感情の表出を妨げたことになろう。それは、大きな身分較差の実感から来る疎外感のようなものであろうか。」(前掲論文:注8に同じ)とし、レントウが「身分較差」を感じていなければ、「自由な感情の表出」の結果、「シュンちゃん」と呼ぶ可能性があったと論じている。また、河野庸介氏は、『わたし』の『ああ、^{ルン}閩ちゃん——よく来たね……。』という言葉を受けて、閩土もその瞬間には、『喜び』とともに、確かに『迅ちゃん!』と言いかけたのだ。しかし、閩土は懐かしい『迅ちゃん』という言葉を読み込み、最後には恭しい態度に変わって、はっきりと『だんな様!』と言ったのだ。」(前掲書:注6に同じ)として、レントウの方でも語り手を「シュンちゃん」と呼びたかったと断定している。

* 『故郷』からの引用は、光村図書『国語3』(平成23年2月28日文部科学省検定済)による。